



警告のニューズレター「角笛」

発行日：2014年8月発行（第52号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

- ◎巻頭メッセージ 「戦争と戦争のうわさ」 エレミヤ
- ◎証「聖書で言われている『弟子』の基準」 E3
- ◎お知らせコーナー 「新刊本の紹介」

< 巻頭メッセージ >

「戦争と戦争のうわさ」 by エレミヤ

本日は、「戦争と戦争のうわさ」として、このことを見ていきましょう。

<戦争と戦争のうわさは終末のしるし>

マタイ 24 章は主ご自身が語られた終末預言として有名です。その中で、主は終末のあらゆるできごとにさきがけて戦争と戦争のうわさが必ず起きることを述べました。以下の通りです。

マタイ24:6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。

このこと、戦争と戦争のうわさは、終末の日を見分けるポイントなのです。そのようなわけで、終末のあらゆる出来事の中で、「戦争と戦争のうわさ」に何か重要な意味合いがあることが想像できるのです。一体どのような意味合いがあるのでしょうか？

<2重の預言成就>

マタイ 24 章の預言成就ということを考えるとき、この章に書かれた預言は2重に成就するべく、語られ、預言されていることがわかります。すなわち以下の2種類の成就です。

1. 西暦70年のローマによるエルサレムへの攻撃、崩壊。
2. 終末の日におけるエルサレムすなわち教会への攻撃、崩壊。

上記1はすでにおきた過去のことであり、2はまだ未来のことです。そして、既に成就した、AD70年のエルサレム崩壊を学ぶ時、未来の事柄である、終末の日に起きる事柄をある程度類推できることができます。

<ローマによる「戦争」は、エルサレム崩壊をもたらした>

この「戦争と戦争のうわさ」のことは、まず最初にAD70年のローマによるエルサレム攻撃の日成就しました。イエス・キリストを十字架に付けて殺したエルサレムの住民はその後、ローマがユダヤを攻撃する、エルサレムを占領するとの「戦争と戦争のうわさ」を聞いたのです。そして、それは、単なるうわさにとどまらず、実際にローマによるエルサレム

攻撃は実現し、その日、キリストを十字架に付けた冒涇の民の首都エルサレムは崩壊し、住民は滅ぼされたのです。このことは、終末の日に起きることの型です。

AD70年に起きたローマとの戦争により、福音書に書かれた以下の多くの災いが神の民に臨みました。

1. ローマによる戦争により、宮の崩壊が行われた。(マタイ24:2)
2. ローマによる戦争により荒らす憎むべきものが聖なる所に立つ(マタイ24:15)
3. ローマによる戦争によりエルサレムの人々は逃走した。(マタイ24:20)
4. ローマによる戦争によりエルサレムは軍隊に囲まれる(ルカ21:20)
5. ローマによる戦争により人々は剣の刃に倒れた(ルカ21:24)

ですので、この預言の最初の成就の日、神の民、エルサレムの民に臨んだあらゆる災いは、ある特定の戦争すなわち、具体的にはローマによる戦争を通してこの民に臨んだことがわかるのです。決して不特定多数な戦争ではなく、あるはっきりした1種類の戦争を通して、エルサレムは崩壊し民は滅んでいったのです。このことは終末の日への預言であり、終末の日にも同じパターンが繰り返されると思われま

す。終末の日においても、ある特定の戦争を通して教会は崩壊する

このことは、終末の日においても繰り返され、終末の日のエルサレム、すなわち教会は、ある特定の戦争を通して、崩壊することが想像できるのです。

かつての日、西暦70年にエルサレムが当時の世界帝国ローマによる戦争の下で滅んだように、終末の日には、終末の世界帝国、獣の国による戦争の下で、エルサレム、現代のキリスト教会は崩壊することが想像できるのです。

終末の獣の国とは私の理解では、アメリカのことです。そのアメリカによる対キリスト教会に対する戦争が終わりの日にしかけられ、結果

キリスト教会は敗北を喫するようになるでしょう。その戦争とは飛行機や戦車による戦争ではなく、逆に対教会、対キリスト教への戦争です。この戦争を通してマタイ24章の終末預言は以下の様に成就するようになります。

1. アメリカ主導の戦争により、祈りの宮としての教会の崩壊が行われる。

マタイ24:2 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」

今アメリカを中心にキリスト教の根本的な教理を覆すための運動が大掛かりにおこなわれています。たとえば、アメリカ政府は501(C)3教会法という法律を教会に対して施行しています。

この法律は、キリスト教の根本的な教理、すなわち、キリストの復活、あがない、再臨などの教理を「受入れない」教会に対してのみ、税の優遇処置を施すというものです。すなわち、神の宮、教会の土台石である、キリストの教え、使徒たちの教えを覆すことを奨励するような悪魔的な法律が施行されているのです。

そして、このような冒涇的な申し出を受入れる教会もアメリカには存在しています。確かに、アメリカによる戦争により、エルサレム、教会の宮は崩壊しつつあるのです。

2. アメリカ主導による戦争により荒らす憎むべきものが教会の聖なる所に立つようになる

マタイ24:15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)

荒らす憎むべき者とは何かというと以下で書かれている反キリストのことです。

2テサロニケ2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。

2:4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。

ここでは、彼が「神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言」すると書かれています。新約における神の宮とは、教会であり、教会における神の座とは、他でもないキリストの座のことなのです。ですから、「荒らす憎むべき者」が、聖なる所に立つ、とは具体的には反キリストが教会のキリストの座を占めるようになる、ということをお話しているのです。

このような日が教会において実現するとはなかなか考えづらいのですが、アメリカの周到な計画の中で、このことはいずれ実現するのでしょうか。具体的にはこれから、イエス・キリストに対するあらゆる非難、個人攻撃、罵詈雑言が許されるようになるのでしょうか。ダビンチコードのように、キリストの歴史の信憑性に疑問を投げかけるようなムーブメントが次々と起こされるようになるのでしょうか。その結果、キリストは嘘つきであり、福音書に書かれたことは真実の歴史ではない、とされ、多くの人々がキリストを憎むようになるのでしょうか。以下のことばの通りです。

マタイ24:9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。

そして、キリストの評判が地に落ち、インチキであるとの評判が行き渡った暁に、反キリストは登場し、そして、今までキリストが占めていた座を代わりに占めるようになるのでしょうか。そして、この日こそ、教会が背教する日なのです。

3. アメリカ主導による戦争によりエルサレム、教会の人々は逃走する

マタイ24:20 ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。

ローマによりエルサレムが崩壊した時、エルサレムの人々がその都から逃走したように、アメリカ主導で、反キリストの教えが公の教会を席卷し、占領するようになったら、その時、正しくキリストにつく人々は「逃走すべき」であることがここでは書かれています。ですので、その日においては、教会にとどまることにみ心があるのではなく、逆に正しい人々はそのような背教の教会からは逃走し、離脱し、離れ去ることが正しいことを知りましょう。以下のことばもこのこと、背教化した教会から離れ去ることをたとえを通して語っているようです。

マタイ24:16 そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。

24:17 屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。

24:18 畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。



路上で福音を語ったゆえに逮捕されるアメリカのクリスチャン

24:19 だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。

4. アメリカ主導による戦争によりエルサレム、教会は軍隊に囲まれる

ルカ21:20 しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。

かつての日、エルサレムはローマの軍隊に囲まれました。その軍隊に囲まれた時からほどなくして、エルサレムはその軍隊により滅ぼされたのです。ですから、軍隊に囲まれるなら、エルサレムの滅亡は近いことを悟るのです。

同じ意味合いで、これから、アメリカ主導で、キリスト教会が攻撃にさらされるようになるでしょう。その教理が攻撃され、キリスト個人が攻撃されるようになるでしょう。すなわち、右も左もキリスト教会への攻撃者だらけ、軍隊だらけになり、エルサレム、教会が軍隊に囲まれる日が来るのです。そして、それは、教会滅亡のしるしなのです。

今まで教会の教理に寛容だった、世間の目が変わり、逆にキリスト教の教えに忠実な人々は原理主義者 (fundamentalist) だとか、大いに批判されるようになるのです。その日が軍隊に囲まれる日なのでしょう。そして、その日が来るなら、逆に教会が崩壊する日も近いことが想像できるのです。

5. アメリカ主導による戦争により人々は剣の刃に倒れる

ルカ21:24 人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

剣というこばには、たとえばが使われています。「また御霊の与える**剣**である、神のことばを受け取りなさい。」エペソ6:17と書いてあるように、剣は神のことばのたとえです。ですので、剣の刃に倒れ、とは、みことばに関する偽りの教理に倒されていく、という意味合いです。

具体的には、キリストのみに救いがあるわけではない、仏教にもヒンズー教にもイスラム教にも救いがあるなどとのインチキの教理に倒されていくことをさすのでしょう。

「捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ」とのことばも示唆的です。かつての日、エルサレムはバビロンに占領され、その地の住民は、約束の地を引き離され、異邦の地へと連れて行かれました。このことは、たとえであり、終末の日においても、キリスト教会はおかしな教理に倒され、その教会に住むクリスチャンは、約束の地、すなわち、神の約束された御国から離されるようになるのでしょう。

< 獣の国は聖徒、クリスチャンに対して戦い、戦争をしかける >

繰り返しますが、終末の日の戦争と戦争のうわさとは、不特定多数の戦争のことを語っているのでなく、逆にある特定の国による、エルサレム、キリスト教会への戦い、攻撃をさします。聖書はその国を獣の国と描写します。終末に起きる獣の国主導の戦争に関して黙示録では以下の様に述べられています。

黙示録 13:5 この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。

13:6 そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。

13:7 彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。

この箇所を見ていきましょう。

黙示録 13:5 この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。

この獣とは、終末の獣の国アメリカのことで、この国に対して、「四十二か月間活動する権威を与えられた。ことが書かれています。42ヶ月間とは、すなわち、3年半の艱難時代のことであり、艱難時代の主役はアメリカであり、また、正しい人々に艱難をもたらすことは、アメリカから起きることがわかります。また、「けがしごとを言う口を与えられ」と書かれています。けがしごととは、神や、神のみことばに逆らうことばです。現在、アメリカは、神にも神のことばにも逆らいつつあります。聖書で明白に禁止されている同性婚を合法である、とこの国の代表であるオバマ大統領が宣言しました。同性愛が合法なら、それに反対することは「非合法」、反対する人々は犯罪者であるという理屈になります。その理屈に基づき、聖書のみことばに従い、あくまでも同性愛に反対するクリスチャンがこの国で逮捕されたりしています。まさにアメリカがけがしことを語っていることがわかるのです。

13:6 そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。

獣の国が神に対するけがしごとを語り、「神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。」ことが語られています。ですので、これから、アメリカ主導で神の御名すなわち、キリストの名前に対するあらゆる攻撃、批判、冒涇が語られるようになるでしょう。また、神の霊を宿す幕屋すなわち、天的なクリスチャンがキリストの名のゆえにアメリカにおいては、ののしられるようになります。

すでにアメリカにおいては、キリストの名において祈ることが教会においてさえ、嫌われつつあります。「イエス・キリストの名によって祈ります」と結ばれるべき祈りが「全能の至高者の名によって祈ります」などといわれています。イスラム教の神の名だか、はたまたルシファーの名によって祈っているのだからわからないような祈りが奨励されているのです。そしてキリストの名が忌避されつつあるのです。さらにこれから、キリスト個人に関する信仰、信頼、評判を崩すような偽りがアメリカ主導で世界に

広がっていくのでしょう。さらに、「その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。」ということも、アメリカにおいて盛んに行われており、正しいクリスチャンはこの国において非難されつつあります。公共の場所で祈ったからといっては正しいクリスチャンが逮捕され、道端で福音を伝えたといつては正しいクリスチャンが逮捕されつつあります。

13:7 彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。

ここでは、彼すなわち、獣の国アメリカが聖徒すなわち、教会やら、クリスチャンに打ち勝つことが許されることが書かれています。ですからアメリカ主導の「戦争」に対して残念ながら、世界のキリスト教会は勝利を得られず、いずれ敗北していくようになるのです。何故敗北するのか？それは、教会の背教のゆえです。また、「あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」ことも描かれています。ですので、全世界のキリスト教会はいずれ冒涇的なアメリカの支配の下に入るようになるのです。全世界においてです。例外はありません。以下の様子に書かれています。

黙示録 3:10 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。

この日こそ、背教の日であり、艱難時代の到来なのです。このことを知り、備えをしましょう。—以上—



福音のために逮捕されるアメリカのクリスチャン

今回も土曜日の弟子の学びの集会の中で、エレミヤ牧師が語られたメッセージを通して受けた学びから証をしたいと思います。そして今回のことも大事な語りかけかなあと思いましたので、しかもエレミヤ牧師が3回にわたっておすすめていましたので、話をさせていただきたいと思います。その時に引用されていた聖書箇所を見てみたいと思います。

参照 ルカの福音書14:25-33

- 14:25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。
 14:26 「わたしのものに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。
 14:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。
 14:28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひとりでもあるでしょうか。
 14:29 基礎を築いただけで完成できなかったら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、
 14:30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった。』と言うでしょう。
 14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。
 14:32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。
 14:33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

25節にありますように、イエスさまの弟子となるために、まずはイエスさまからの声かけがあります。レムナントキリスト教会にかぎらず、それぞれの教会に弟子の歩みや献身の歩みをされている人がいらっしゃるかと思います。そして洗礼を受けてすぐに弟子の歩みや献身の歩みに入る人は皆無ではないにしろ、そういう人はあまりおられないと思います。私もそうでしたが、大半の人が群衆の歩みをしていて、イエスさまの弟子としての歩みをしていく、というパターンだと思います。ここで「大勢の群衆」ということばが使われていますが、まさにイエスさまも「群衆の歩み」をしている人たちに声を掛けられたのです。

さて、26,27,33節において、イエスさまは「弟子になるための条件」について言われています。それぞれの節でイエスさまが提示している弟子の条件について、箇条

書きにして順に見てみましょう。

①自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、自分のいのちを憎む者

26節で、「父、母、～自分の命を憎む者」ということが言われています。ちなみにここに出てくる「憎む」ということばですが、世の中で言う「絶交」とか「絶縁」とか「憎しみを感情に抱く」とか、そういうことではありません。ここでの節で言われているのは、たとえば自分の実際の父や母、妻や子ども、兄や弟や姉や妹に弟子として歩むことを反対されたときに、それを振り切って歩んでいくのか？ということ問われているのです。そしてよく話をしていますように、聖書は多くのたとえが使われていますので、たとえの意味合いも見たいと思います。「父、母」は信仰の「父、母」ということに通じます。つまり教会の「牧師」や「神父」のことを言われていると思います。また、「子ども」とは「信徒」のことを言われていると思います。「兄弟、姉妹」はクリスチャンの「兄弟姉妹」のことを指すと思います。ですからここで言わんとしているのは、たとえば教会の牧師や信徒や同胞である兄弟姉妹が言っていることと、神さまの言われていることがぶつかった時に、みことばのほうを優先するのか？はたまた牧師や信徒の言うことを優先するのか？ということです。もし、みことばをさしおいて牧師や信徒や兄弟姉妹の言うことに聞き従うなら、彼らを憎んでいるという風には見なされず、ゆえにイエスさまの弟子にふさわしくない、ということ言われているのです。また、「自分のいのちを憎む者」とも書かれています。これはどういうことを言われているのか？そのことに関連して、別の箇所を参照してみたいと思います。

参照 ヨハネの福音書12:25

12:25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。

「自分のいのちを愛する者はそれを失い」とありますように、自分の肉体のいのちを惜しむ時に、反対に、「それ(いのち)」を失う、ということ言われているのです。「それ(いのち)」とは、恐らく「永遠のいのち」のことを言われていると思います。

「肉体のいのち」はすでに私たちは得ていますので、しかも後半に、「永遠のいのち」のことについて書かれていますので、まさにそのことを指すと思います。また、このことは単に肉体のいのちのことだけを言われているのではなく、自分の思いや考えのことをも言われていると思います。つまり神さまの言われることよりも、自分の思いや考えを優先する人も、「自分のいのちを愛する者」だと思います。

でも、そういう歩みをしているなら、キリストの弟子にふさわしくないと、はたまた永遠のいのちを失うということ言われているのです。反対に、「いのちを憎む者」は「永遠のいのちに至る」と言っているのです。そう、つまり肉体のいのちをはじめ、自分の思いや願いや考えのすべてをひっくるめて神さまに捧げていく歩みを選ぶなら、「自分のいのちを憎む者」と神さまから見なされ、「永遠のいのち」を受け継ぐのです。はたまた聖書で言われている弟子の基準を満たすのです。次を見ましょう。

②十字架を負う者

これは上記で述べましたようにまさに、「自分のいのちを憎む」ことに通じるのではないのでしょうか？「十字架を負う」というときに、自分の思いや考えを優先していたら、とても負うことなんてできません。なぜかと言うと、イエスさまが示す方向というのは往々にして自分の思いとは逆方向のことが多いからです。一例を挙げるなら、「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」ということが聖書に書かれていますが、これって自分の思いや考えや感情に死ななければ、実行することはできません。でも、そのようなことを押し殺してこのことばを実践していくのなら、これはまさに、「十字架を負う」歩みをしていると言えます。そしてこのことにかぎらず、ありとあらゆる状況の中で、「自分の思いや感情や考えは大事だけれど、でも聖書のみことばを優先しよう！」という風に進んでいくのなら、「十字架を負う者」になれるし、イエスさまの弟子の基準にもピッタリ合います。反対にどこまでも自分の思いや考えや感情に固執してそこから踏み出さない時に、イエスさまの弟子とはおよそ縁遠い者となってしまいます。また皆さまもご存知のように、天の御国の条件のひとつとして「十字架を背負う」ことが聖書では言われていますので、もし、「十字架を背負わない」というときに、イエスさまの弟子になれるのはもちろんのこと、天の御国に入るのも危ないと思いますので御心を感じたり、志を与えられたのでしたら、ぜひ「十字架」を背負っていきましょう。さらに見てみましょう。

③自分の財産全部を捨てる者

33節では、「財産全部を捨てる者」ということが言われています。エレミヤ牧師が言われていたことですが、

KJV訳だと「財産」のところは、「持ち物」と訳されているそうです。そう、「財産」なんて言うと、お金とかダイヤモンドなどの宝石類とか車とか住宅とか土地とか、そういうイメージがありますよね？ですが、「持ち物全て」のことを言われていますように、単に所持品のことだけのこと言っているのではなく、地位や名誉や目標や達成や能力等も含まれます。そういったものを持っていることによって、それが弟子の歩みの足かせとなったり、妨害になったりするのなら、捨て去ったり、捧げたりしていきなさい、ということ言われていると思います。もし、本当にそのことを実践していくのなら、「財産(持ち物)全部を捨てる者」と見なしていただけます。逆にイエスさまに従うために、捨てるべきものを捨てきれない際に、イエスさまの弟子になることはできないと思います。

弟子の歩みをしていて、万が一にもイエスさまから「捨てなさい」とか「捧げなさい」と言われたときに、どのように対応するか？は大事です。その時に間髪を入れずに捨て去ったり、捧げていくのなら、イエスさまは喜んでくださいますし、イエスさまの前に「弟子」として見なしていただけるのです。ちなみに「間髪を入れずに」なんていう表現をさせていただいたことには理由があります。それはペテロやヨハネやヤコブがそうだったからです。イエスさまから声を掛けられた時に、彼らがしたことと言えば、「すぐに網を捨てて従った」ことです。私個人としてはこのことは大事だと思いましたので、念のためにKJV訳も確認してみましたところ、「すぐに」のところは“straightway”という単語が使われていました。日本語と同じく「すぐに」とか「さっそく」という意味合いです。人間的には「いずれ」とか「いつか」なんていうことも考えると思いますが、「捨てる」ことをはじめどんなことも、「すぐに」ということに、どうもポイントがあるようです。特に神さまへの「従い」に関しては、「すぐに」というのが聖書で言われている標準のようですので、そのあたりも正しく理解しておきたいと思います。

以上のことを集会でのメッセージを通して教えていただきました。そしてエレミヤ牧師が、「弟子の歩みを志すのはひとつのことです。しかし全うするかどうかは別のことです。ゆえに主が言われている基準を理解しましょう。」ということをおっしゃっていたのですが、私も全くその通りだと思いました。かつては集会に参加して訓練をしていけば、単にそれでイエスさまの弟子になれると思っていた時期もありましたが、それは勘違いだということを理解しました。もちろん集会に参加したり、訓練を行っていくことは大事なことで今後も継続していきたいと思いますが、それはそれとして、しかし聖書で言われている、「イエスさまの弟子の基準」を尊重してこれからも歩んでいきたいと思っています。上記に

掲げたようなことは、決して耳障りの良い話ではありませんが、イエスさまが定められたことなのでぜひ、その基準に合わせられるように祈り求めつつ、歩みや働きに励んでいきたいと思いました。今回も大事なポイントにつ

いて語ってくださった神さまに栄光と誉れがありますように。

—以上—

<お知らせコーナー>



- ◆神により永続を約束され、万世一系が決して途絶えないことを約束されたダビデ王朝は、400年の歴史の後、バビロン捕囚を契機に歴史の闇に消え、その行方はようと知れない。
- ◆全能の神、聖書の神の堅い約束、「ダビデには、イスラエルの家の王座に着く人が絶えることはない。」との約束は破られ、万世一系は、果たして途絶えてしまうのか？
- ◆バビロン捕囚により、ダビデ王朝が行方不明となったのは、今から2600年ほど前のことである。
- ◆その頃、東の島国において、万世一系の王朝が誕生する。
- ◆この王朝、皇紀2600年を誇る万世一系の天皇家こそ、ダビデ王朝の正当な後継者ではないのか？
- ◆人種、言語、文化、習慣、歴史、あらゆる面において、天皇家とダビデ王朝には、類似性がある

エレミヤの新刊。「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」

定価：1500円+消費税。

ご注文の方は以下まで、連絡下さい。

警告の角笛出版： fax: 020-4623-5255, メール truth216@nifty.com